

經濟論叢

第七十八卷 第一號

農林業課税の問題	神戸正雄 (1)
マックス・ウェーバーが考えていた經濟理論	出口勇藏 (12)
社會政策學の理論的性格	岸本英太郎 (29)
時系列回歸分析における方程式誤差と變數誤差	阿部統 (55)
山陽自由黨の組織過程	内藤正中 (70)
ジェントリの社會的經濟的性格	武暢夫 (96)
アメリカにおける特別償却本質論	高寺貞男 (116)
ソヴェト社會史の時代區分について	富岡裕 (134)

[昭和三十一年七月]

京都大學經濟學會

ジェントリの社會的・經濟的性格

——ソヴェトにおけるイギリス革命の研究(一)——

武 暢 夫

一

一七世紀のイギリス革命の特色の一つは、この革命においてはブルジョアジーが貴族のなかの進歩的な部分と同盟しているという現象である。

マルクスとエンゲルスは、イギリス革命の階級配置がフランス革命のばあいとちがっていることを指摘した。マルクスによれば、「イギリス革命の保守性は、ブルジョアジーと大部分の大地主との永続的な同盟のためであった。その同盟は、イギリス革命と、分割地制度によって大土地所有を廢止したフランス革命とを、本質的に區別するものではない」(Karl Marx, A Review of Guizot's Book «Why has the English Revolution been successful», Marx Engels on Britain, Moscow 1953, p. 347)。こうして、マルクスはイギリス革命のときの貴族の特殊な役割をあきらかにしている。フランスでは、貴族は一つの階級として封建勢力の陣營にいたが、イギリスでは、貴族は二つの部分に分裂した。その一部は封建貴族であって、封建勢力の基本的な力となり、他の部分はブルジョア化された新貴族であって、ブルジ

『アジャー』と行動をとにした。このような事情がイギリス革命の特性を決定した。新貴族とブルジョアジャーの同盟は、絶對主義にたいしてブルジョアジャーの地位を強化したが、同時に、イギリス革命に保守的な性格をあたえ、反人民的な性格をつよくしたのである。

ブルジョアジャーは、絶對王制、封建貴族、國教會にたいするたたかいにおいて、一方では新貴族と同盟することにも、他方では、フランス革命のばあいと同様に、人民大衆とも同盟した。それは、イギリス革命が、解體しかけていた封建制度のなかで資本主義的マニユファクチュアがすでに發展していたが、機械制大資本主義工業はまだ存在しなかつた時期におこつた初期ブルジョア革命に屬し、この段階ではブルジョアジャーは人民大衆を貴族制とたたかひに動員するに足るほど革命的であつたからである。初期ブルジョア革命のときには、プロレタリアートは、まだ階級としては成立しておらず、ブルジョアジャーが革命の指導者となる。ブルジョアジャーは、農民と都市平民の戰鬭力を利用することによつてはじめて、封建制度をうちこわすことができた。エンゲルスは、イギリス革命のときの農民（ヨーマン）と都市の平民的要素との決定的な意義を強調した（エンゲルス『空想から科學への社會主義の發展』〔國民文庫版〕三四ページ）。イギリス革命においても、ドイツ農民戦争やフランス革命のばあいと同様に、農民層が第一の推進力であつた（レーニン『ロシア革命の評價によせて』全集第一五卷四三—四四ページ）。エンゲルスは、革命のときの農民層の役割を強調してこういつている。「都市ブルジョアジャーは、それ（四〇年代の革命—筆者）に最初の一撃をくわえたが、農村地方の中農層つまりヨーマンリは、それを勝利にみちびいた」（エンゲルス『法律的社會主義』マルクス—エンゲルス全集〔ロシア語版〕第一六卷第二部二九七ページ）。マルクスによれば、イギリスのヨーマンリは、イギリスの國王と封建勢力にたいするたたかひのときに、「クロムウェルの主力」（『資本論』〔青木文庫版〕第四分

冊一〇九六ページ)となった。革命の主力である農民層と都市平民との同盟は、「一七世紀のイギリス革命、一八世紀のフランス革命にひろがり(passe)と力とをあたえたのだ」(レーニン『選挙戦の原則的問題』全集第一七卷三七三ページ)と、レーニンは強調している。「もしも自作農(ヨーマンリ)と都市の平民層がいなかったならば、ブルジョアジーだけでは、けっしてこの戦いをあくまでたたかひぬきはしなかったであらうし、またけっしてチャールズ一世を断頭台へおくりもしなかったであらう」(エンゲルス『空想から科學への社會主義の發展』〔國民文庫版〕三四ページ)とエンゲルスがいったように、國王にたいする決定的な勝利は人民の手によってかちとられた。人民大衆は、一時は、ブルジョアジーと新貴族を自己の意志にしたがわせ、チャールズ一世の死刑と共和國とをかちとるほどの力をもっていた。

しかし、レーニンが、イギリス革命をブルジョア民主主義革命とよんだのは、(レーニン『十月革命四週年記念日によせて』全集第三卷三〇一—三二ページ)、一六四九年の事件(王の處刑、共和國の宣言)をかんがえにいれてのことであつて、このような特徴づけは、革命の全段階に妥當するものではない。人民の手によって勝利をえたブルジョアジーと新貴族は、勝利の瞬間から、人民大衆とたもとをわち、人民大衆にたいする恐怖から、クロムウェルの軍事獨裁を支持し、遂には、チャールズ二世をむかえて封建的・王制的勢力と妥協するにいたつた。こうして、イギリス革命は、ブルジョア革命としても中途半端に終つた(Christopher Hill, *«The agrarian legislation of the Interregnum»* Eng. Hist. Rev. 1940, Vol. 55, No 218, p. 249)。イギリス革命のこのような保守的な性格は、革命の農業問題の解決のしかたに、とりわけつよくあらわれている。フランス革命のばあいには、分割地的土地所有の創設というかたちで封建的土地關係が革命的に破壊され、フランスの農民層は、ブルジョア的な土地所有權をあたえられた。だが、イギリ

ス革命においては、封建的土地保有(feudal tenure)は、一面的にしか廢止されなかった。つまり、一六四六年二月八日の軍役保有制の廢止、後見裁判所の廢止によって、大土地所有者の所有地にたいする封建的制限はのぞかれ、大土地所有者は自己の所有地にたいするブルジョアの私有權を獲得する。しかし、贍本保有ソルティナグの保有地は自由保有フリーホルドにはかわらず、彼らはその保有地にたいするブルジョアの所有權をえることができなかった。イギリスの農民層は、封建的關係の完全な破壊、農業問題の民主的な解決、農業革命の完成、すなわちブルジョア民主主義革命の基礎をかちとることができなかった。大土地所有者による土地所有の獨占と農民層の收奪、これが農業問題における革命の成果であった。

このようなイギリス革命の保守的な性格は、つぎの事情によって説明される。それは、一つには、ブルジョアジ―と新貴族の同盟がブルジョアジ―を強化するとともに革命に保守的な性格をあたえたこと、また一つには、民主的要素——農民層と都市平民層——が特有の弱點をもっていたことである。イギリス革命のときの民主的要素の弱點を、イエ・ア・コスミンスキーは、つぎのように説明している。すなわち、(1) すべての初期ブルジョア革命に共通のことながら、階級としてのプロレタリアートができていなかったこと、(2) 初期ブルジョア革命の主力である農民層が一六一七世紀前半を通じての圍込運動によつて弱體化されていたこと、(3) 都市平民の構成が種々雑多であったこと、(4) 都市と農村の勤勞大衆のあいだに組織的關係がなかったこと、さらに、イギリス革命において決定的な役割をはたした革命軍において、ヨーマンが主力となりながら、貴族とブルジョアジ―が指導的地位についていたことなどである(コスミンスキーおよびレヴィツキー稿『一七世紀のイギリス・ブルジョア革命』一〇ページ)。このため、再三のころみにもかかわらず、民主的要素は權力をかちとることができず、新貴族とブルジョアジ―は、

終始、權力を維持したのである。

このようにみてくれば、イギリス革命を正しく理解するためには、第一に、ブルジョアジーと新貴族との同盟の問題とりわけ新貴族の社會的性格の問題と、第二に、革命のときの農民層と平民との同盟とりわけ農民層と農民層の役割の問題を解決することが必要である。第二の問題は二つにわかれる。その一つはヨーマンリをどのような歴史的範疇とかがえるかということであり、ヨーマンリの解釋によつて革命のときの農民闘争の評価もかわってくる。つぎには、イギリス革命においては、封建的土地關係の廢止は、貴族とブルジョアジーに有利なように一面的におこなわれたが、これにたいして農民層はどのようにたたかつたか、つまり、農民的な農業綱領があつたのかどうかという問題も重要である。

ここでは、ソヴェトの史學でこれらの問題がどのようにあつかわれてゐるかに注目して、ソヴェトのイギリス革命研究者、特にエム・ア・バルク、ヴェ・エム・ラヴロフスキーおよびユ・エム・サプリーキンの三人の歴史家の見解をとりあげた。これら三人の歴史家の見解を中心として、つぎのような問題、すなわち、(一) ジェントリの社會的・經濟的性格(本稿)、(二) イギリス革命における農民闘争評價の問題(次稿)——このなかにはヨーマリンの解釋、革命のときの農業綱領、ディッガーズの再評價の問題をふくむ——について、問題點を整理してみたい。

二

ソヴェトの史學でも、新貴族の社會的性格とイギリス革命における新貴族の役割という問題は、まだはっきりしていない。ところで、新貴族は、ソヴェトの史學では、マルクス主義の古典のよびかたにならつて「新貴族」

(новое дворянство)とよばれているが、英語の gentry の發音をとって「ジェントリ」(Джентри)とよばれているばあいも多い。だから、新貴族は現在イギリスの史學でも問題になつてゐるジェントリという階層にほぼ相應するものと考えられてゐると思つてもよいだろう。ソヴェトのイギリス革命研究者は、ブルジョアジーと新貴族ジェントリの同盟というマルタスのシェーマにもとづいてイギリス革命の特殊性を説明しようとしてゐる。^註しかし、この新貴族ジェントリの社會的・經濟的性格はどうかという問題になると、ソヴェトの學者のあいだにも、かなりの意見の相違がある。

註 たとえば、コスミンスキーおよびレヴィツキー篇『一七世紀のイギリス・ブルジョア革命』(一九五四年)第一卷、八一九ページ、七〇—七一ページ、二〇一ページ、三九五ページ、第二卷一六八ページその他。

エ・エム・サプルイキンは、彼の論文『ハリントンの政治觀の階級的本質』(論文集『中世』第四集一九五三年二五五—二七〇ページおよび第五集一九五四年二二八—二四九ページ)において、ハリントンを近代民主主義の父あるいは社會主義の先驅者と特徴づけようとした從來の見解に反對して、ハリントンをこそ新貴族ジェントリのイデオログにほかならないと考へ、そのブルジョア的・貴族主義的本質をあきらかにしようとした。この論文のなかで、サプルイキンは、ハリントンの政治觀を分析する前提として、新貴族ジェントリの社會的・經濟的性格、および新貴族ジェントリとブルジョアジーの同盟が成立する經濟的基礎についてのべてゐる。

イギリスの農村では、一四世紀の末には農奴制が解體し、一五世紀の末からブルジョア的な變革がはじまり、それによつて農民的土地所有が暴力的に破壊され、農業制度は資本主義的に改造される。そのため、一七世紀のなごろまでには、イギリスの農村には資本主義がいちぢるしく進展する。一六—一七世紀の農業革命において、土地

は農民、封建貴族、教會、國王の手から貨幣をもちあたらしい條件のもとで經營することができるもの手につつた。こうして、サプリーキンは、一六——一七世紀の農業革命を、新土地所有者階級によって資本主義的な土地所有が形成される過程としてとらえ、同時にその反農民的性格を強調している。

サプリーキンは、資本主義的な土地所有が形成される過程に一七世紀のイギリス農村のいろいろの階層がどのように参加したかをあきらかにするという課題を提起し、まず、貴族についてこういつている。「一七世紀のイギリスの社會生活のもっとも重要な契機は、農村に資本主義關係が發展するとともに貴族の階層分化がすすんだことであつた」(サプリーキン前掲書第四集二五二ページ)。イギリスの貴族の一部は、封建地代その他の封建的收入に依存しており、イギリスに發生したブルジョア的な經濟に適應することができなかった。サプリーキンは、貴族のこのような部分を、ふるい封建的な aristocracy および經濟的におくれた地方であるイングランド西部および北部諸州の中小貴族と特徴づけている。ふるい貴族の特徴は、過度の浪費や負債のために自分の土地を手ばなさねばならなかつたことである。こういうふるい貴族は、革命のときには絶對主義の側についたのである。

註 コスミンスキールおよびレヴィツキー篇『一七世紀のイギリス・ブルジョア革命』のなかでも、このような特徴づけがおこなわれている(同書七〇ページ。執筆者——ヴェ・ユン・セミョノフ)。またヒルも同様のかんがえかたをしめしている(C. Hill 《The English Revolution》 1941, p. 25, 《The agrarian legislation of the Interregnum》, Eng. H. R. 1940, Vol. 55, No. 218, p. 222)。

サプリーキンは、新貴族がどのような階層であるかについては、つぎのようにかんがえている。新貴族のなかには若干の aristocracy がふくまれるが、その中心となるのは中位の貴族 (gentry) であり、身分からいへば

commons に屬する。新貴族は「ブルジョアの出身であり、ブルジョアの傾向をもっている」貴族であつて、その基本的な職業は農業と牧羊であり、資本主義的な地代と利潤とが一六—一七世紀の新貴族の主要な收入源であつた。ふるい貴族は土地をうしなつたが、新貴族はあらゆる手段をつくして土地を擴大した。一六—一七世紀のイギリスのジェントリは、大きな成功をおさめ、一方、^{註三} aristocracy は没落する。

註一 サプリイキンは、彼のべつの論文『イギリス・ブルジョア革命史の若干の問題について』（論文集『中世』第四集一九五三年三五—三七〇ページ）のなかで、エム・ア・パルク『クロムウェルとその時代』（一九五〇年）の論評にことよせて、イギリス革命にかんするいろいろの問題を提起した。そのなかではジェントリの問題もあつかわれているが、サプリイキンは、新貴族の上層部にはチューダー王朝のときにつくられたあたらしい aristocracy もふくまれるのであるが、パルクは新貴族を單に貴族の下層および中層としているだけで、このことを評價していないとして、パルクを批判している。しかし、サプリイキンはこれがどういう意味をもつかについてはのべていない。

註二 サプリイキンは、ふるい貴族を、北部および西部の貴族と特徴づけながら、新貴族については、なぜか東南部地方の貴族であるといっていない。また、新貴族のなかにも、系譜的には、舊來の貴族、農奴から上昇したもの、商人、手工業者、その他がふくまれるものと思われるが、こういう階層の各々がどのような比重をもっているのかについても、ふれられていない。

註三 ジェントリの興隆と aristocracy の没落というテーマは、トニーの『The rise of gentry』の發表以來、イギリスの史學でもジェントリ論の中心問題となつてゐる。

サプリイキンは、ジェントリが土地を獲得した、いろいろのばあいを説明している。

農業革命のはじめから、ジェントリは、農民の土地を積極的に収奪した。ヴェ・エフ・セミョノフの研究（二五世紀末と一六世紀はじめのイギリスにおける開拓）——論文集『中世』第一集一九四二年一〇六一—一〇七ページ）によれば、一

五一七年の團込委員會にたいする報告のなかにあらわれた團込者のうち大多數が貴族であり、そのなかでもジェントリが多くを占めていた。この時代には、共同牧場をめぐって、ジェントリと農民のあいだにしばしばあらそいがみられる。農民の土地にたいするジェントリの攻撃は、農民的な保有の獨占 (monopolisation) というかたちでおこなわれることもあった。ア・エヌ・サヴィンの研究したウィングダム・マナアの記録によれば、このマナアの五八人の身分ある (Baronage) 保有者のうち四〇人がコピー・ホルダーである。そこで、サヴィンは、一六三〇年にはこのウィングダム・マナアに身分ある人々が侵入していた、と結論をくだしている (ア・エヌ・サヴィン『東部のマナアの歴史』[『ヒム・カ・リュバフスキー記念論集』一九一七年二七五、二七七ページ]、[『二つのマナアの歴史』一九一六年二三七―二三八ページ])。

ヘンリ八世による修道院領の廢止もまた、ジェントリが土地を手にいれた大きな契機である。それによつて修道院の土地のいちじるしい部分が貴族 (peers) やジェントルマンの手にわたった (ア・エヌ・サヴィン『イギリスの修道院領解放』一九〇六年、五三五―五三七、五四六―五六一ページ)。しかし、つぎの二世代のあいだに、貴族のえた修道院領の多くはジェントリの手に入った (Tawney『The rise of gentry, 1558-1640』, Fox, H. R., Vol. XI, 1941, p. 28)。アルハンゲリスキーの研究によれば、革命期の土地移動においても、ジェントリが多くの土地を獲得している^註。こうして、ジェントリは、貴族や教會の土地をうけつぐとともに、その權力をもうけついだというのである。

註 ニュース・イ・アルハンゲリスキー『イギリス革命の農業立法』第二部一九三九年二五五ページ。沒收された没収王派 (delinquent) の土地販賣にかんして、アルハンゲリスキーが Record Office に保存されている一六五二―一六五五年の「示談委員會」(The Committee for Compounding) の記録によつて研究したところによれば、四〇二の記録例のうち購買者の身分があまりにされ

ている一三八のばあい、ロンドンのブルジョアが五〇・七三%を占めて第一位であり、ジェントルマンと *officers* がこれについている。しかし *Joan Thirk* が一二の南東部の州の *delinquent* の土地の移動について研究したもの (*The sale of Royal land during the Interregnum*, Eco. H. R. 1952, Vol. 5, No. 2, p. 188-207) をみると、王黨派の土地所有者は、けっきよくのところ、その領地の全部あるいは一部を恢復したものとされており、アルハンゲリスキーの見解は再検討が必要のようである。

サプリーキンは、ジェントリのなかにブルジョア的な要素が吸収されたことを重視している。一七世紀には、都市ブルジョアジーも土地に大きな関心をもち、都市の資本は、大規模に農村にながれこんだ。都市の資本が土地にながれこんだことによって、ジェントリのブルジョア化が促進された。一方、イギリスでは、ジェントリの身分的閉鎖性がなかったため、土地をえたブルジョア的な要素は、たいていのばあい、ジェントリのなかに吸収され、ジェントリを強化した。^註

註 サプリーキンはブルジョアジーが土地を手にいれたことについては、Clarendon, *History of Great rebellion* (Vol. II, p. 321) や前記のアルハンゲリスキーの研究から例をひいているが、ブルジョアジーがその土地をいかに經營したかをあきらかにしていない。

このような条件のもとで、ブルジョアジーとジェントリは、農業問題において一つの方向をとるようになり、このことによってブルジョアジーとジェントリの同盟が強化されたのである。

こうして、イギリスでは、土地が農民や封建貴族や國王や教會の手からジェントリとブルジョアジーの手へわたったことによって、資本主義的な土地所有がつくられた。ジェントリとブルジョアジーが農業革命に積極的に参加した主な動機の一つは、サプリーキンによれば、資本主義的な地代をえることであつた。^{註一} 資本主義的な地代は半隷

屬的な農民ではなくて賃労働を搾取する資本家的借地農の經營が土地でおこなわれることを前提するとして、サプ
 リイキンは、農業における資本・賃労働の關係的發展を強調している。^{註二}また、資本主義的借地關係的發展の指標は
 定期借地 (tenancy) と定期借地にたいする地代の増大である。これについて、サプリーキンは、バロウ・マナア
 とブランプトン・マナアの例をあげている。^{註三}

註一 サプリーキンは、新貴族とブルジョアジが農業革命に積極的に参加した他の動機すなわち資本主義的利潤の獲得という
 點を無視するわけではない。彼は、彼の論文の二五六ページの註のなかでこのことをことわったうえで、イギリスの貴族の
 なかには一人の人間が同時に資本家であり地代収取者であり借地人であり領主であるものが多い、ともいつている。

註二 これについては、サプリーキンは、Th. Smith 《De republica Anglorum》, Cambridge, 1912, p. 47, D'Avenant 《The political
 and commercial works》, vol. II, Lond, 1771, p. 210, E. Chamberlayn 《Magna Britanniae Notitia》 Lond, 1727, p. 176—177,
 P. Chamberlayn 《The poor mans advocate, or Kingdoms Samaritan》 Lond, 1649, p. 1, 13 など、當時の著作者の證言を引用し
 ているだけで、實際の例をあげていない。

註三 バロウ・マナアでは、一五六六年には定期借地は存在しないが、一六三三年には七人の定期借地農が七三六エーカーの土
 地を保有し、彼らが支拂った地代は領主がうけとった地代總額の四五・九%に達した。一方、五七の贍本保有農は一三三二
 エイカアを保有したが、その支拂った地代は全體の五四・一%にすぎない。一六四九年には、一〇人の定期借地農は八三六
 エイカアを保有し、その支拂った地代は全體の六七%であり、贍本保有農は四六人で一一一四エイカアを保有し、全體の二
 九%の地代を支拂っただけである。一六五〇年には、ブランプトン・マナアは、バロウ・マナアよりも企業的に經營され、
 定期借地からの収入がマナアの主な収入源であつたが、このようなマナアに有利な大きな定期借地はジェントリの手にあつ
 た。彼らは五二八エイカアを保有し、四〇三ポンドを支拂う。あるジェントルマンは一エイカアにつき一二シリング四ペ
 ンスを、またある Squire は一エイカアにつき一ポンド四シリングを支拂ったが、贍本保有農は一エイカアにつき一シリング
 七ペンスを支拂った。なお、サプリーキンは、この例はラヴロフスキーの研究成果をかりたものである、とことわっている。

しかし、新貴族＝ジェントリの土地所有は、二つの點で制限をうけていた。一つには、慣習的土地保有者としてジェントリの土地を保有する人身的に自由な農民の存在によって、土地所有者がその土地を自由に處分することがさまたげられた。また、貴族の土地所有は軍役保有 (knight tenure) であつて、封建的位階制の長である國王に隷屬しており、そのために、自分の土地を處分する權利について國王の監督をうけるばかりか、大きな物質的損害をもうけた。そこで、新貴族の土地所有者は、自己の土地所有を封建的所有からブルジョアの所有にかえようとして、農民からも國王からも自己の土地所有を解放しようとしたのである。

したがって、新貴族の攻撃は、國王の權力にむけられるとともに、農民の土地保有 (copyhold) にもむけられたのである。農民の土地保有にたいするジェントリの攻撃は、前にのべたような、圍込や農民の共同地の收奪のほかに、慣習地代 (customary rent) の値上げというかたちでもおこなわれる。サプリーキンは、サヴィン、アルハンガリスキー、ラヴロフスキーらの研究を引用して、それをしめしている。こうして、一六―一八世紀のジェントリとブルジョアジの土地保有者は、自己の土地所有を擴大するとともに、ふるい土地所有を資本主義生産に順應させ、農村におけるブルジョア革命を完成した。しかし、この農業革命は、ひじょうに反農民的な性格をおびている。サプリーキンは、イギリスにおいてブルジョア的な土地所有が創設される過程を、レーニンを引用して (レーニン『一九〇五―一九〇七年の第一次ロシア革命における社會民主黨の農業綱領』全集第一三卷「大月書店版」二七〇―二七三ページ)、地主のためにする「農民的土地所有の暴力的變革によつて」おこなわれたところの、中世からの「土地の清掃」と特徴づけている。土地所有が、國王や教會や封建貴族の手からジェントリとブルジョアジの手にうつったことは、農民＝保有者の收奪をとまなつたが、これがまた、この過程の基本的内容であつた。

註

サヴィン『二つのマナーの歴史』、アルハンゲリスキー『イギリス革命の農業立法』第一部二七一—二七四ページ、ラヴ
ロフスキー『一六一—一八世紀のイギリスにおける土地所有の分配と地代形態』——『ソ同盟科學院通報』歴史および哲學篇一
九四八年第五卷第二號一九六一—一九七ページ。

土地所有者の觀點からみれば、ブルジョア革命の課題は、彼ら土地所有者にたいしてブルジョア的な土地私有權をあたえることである。イギリス革命は、軍役保有制の廢止というかたちで、この課題を解決した。サプリーキンは、この軍役保有制の廢止の社會的・經濟的意義を、こう考えている。すなわち、軍役保有制の廢止によって、ジェントリやブルジョアジの土地所有者には、土地にたいするブルジョアの私有權があたえられたが、一方、農民層の生存の保證はうばわれた。というのは、貴族は、彼らの財産にたいする國王の後見から解放されただけでなく、自己の所有地にたいするブルジョアの私有權を手にいれたことによって、自己の所有地の保有者——農民を容易にまた自由に收奪する可能性があたえられたからである。その結果、土地の保有者——農民にたいしては、チューダー王朝や初期スチュアート朝が圍込を阻止しようとしたばあいのような政府による援助はもはやなく、圍込を法律的に規制しようというすべての企圖は、失敗に終った。^註

註

ユム・ア・バルク『イギリス革命と農民的土地所有の運命（いわゆる《軍役保有制の廢止》について）』（論文集『中世』第五集一九五四年三二—五八ページ）や、コスミンスキーおよびレヴィツキー篇『一七世紀のイギリス・ブルジョア革命』のなかの第二章『イギリス革命の農業政策と農業立法』第四節『封建的土地所有形態の廢止とそれがイギリス農民層の運命にあたえた意義』三九五—四〇八ページ（執筆者——アルハンゲリスキー）においても、同様の觀點から軍役保有制廢止の問題があつかわれている。

一七世紀のイギリスで軍役保有制廢止のこのような地主的な本質を見ぬいていたのは、サプリーキンによれば、

ウインスタンリだけであつた。一七世紀のイギリス農村で農業關係を改造するためにたつたかたは、小屋主農(cotters)、貧民(paupers)、および農民に保有者であつた。農民層の分化によつて、またジェントリや富裕な農民や借地農業者(farmers)のためにおこなわれた農業革命によつて、彼らは、土地なき貧民に轉化しつゝあつた。ウインスタンリとディッガーズは、これら貧民を代表し、財産の平等と共有という要求をかけた、たつたのである。サプリーキンは、一七世紀のイギリスにおいて財産の平等と共有の要求を實行することは、中世的イギリスの土地關係のすべての制度の民主的な變革を意味するものであり、そこに、平等主義的「共產主義」のスローガンのもとにあらわれた一七世紀のイギリスにおける農業革命の農民的な縁の歴史的意義があつたのだ、と考へている。^註

註 ディッガーズこそイギリス農村の民主勢力を代表するものであるというサプリーキンの見解には注目すべきものがあるが、ディッガーズをどのような階層としてとらえるかについては、サプリーキンの考えかたに、ただちにしがうことはできない。この問題は、次稿であつかわれる。

サプリーキンは、このように、一六—一七世紀のジェントリのブルジョア的な性格を重視しながらも、彼のべつの論文『イギリス・ブルジョア革命史の若干の問題』——論文集『中世』第四集一九五三年三五—三七〇ページ——において、ジェントリについてつぎのような特徴づけをあたえている。すなわち、「一六—一七世紀の新貴族の土地所有者としての基本的特徴をきめるものは、なによりもまず、彼らは、イギリス農村における資本主義的發展とともに、それに適應して自己の土地所有を維持し、擴大し、自己の土地所有の獨占を資本主義的收入というかたちで實現している、つまり、借地農に貸出したばあいにははらわれる自分の土地の地代を手にいれはじめたという點である」

(サプリーキン『前掲書』三五八ページ)。だが、サプリーキンにしても、ジェントリのブルジョアの企業家的な面をまったく無視するわけではない。ただ、彼は、ジェントリの富と權力の支柱は、基本的には、その土地所有にあったというのである。

三

これにたいして、單なる土地所有だけでは一六—一七世紀のジェントリの富強を説明することができないという見解がある。それは、エム・ア・バルクおよびヴェ・エム・ラヴロフスキー『一七世紀前半のイギリスの新貴族とヨーマンリの社會的な本性について』(『歴史の諸問題』一九五九年第六號七七一八六ページ)である。

バルクとラヴロフスキーも、ブルジョアジーと新貴族—ジェントリの同盟ということによって、イギリス革命の保守的な性格を説明しようとする點、イギリスにおける貴族の分裂という事情を重視する點、ジェントリの土地所有の經濟的性格をブルジョア的なものと考えている點ではサプリーキンとおなじである。しかし、彼らは、土地所有者としてのジェントリの性格を強調するサプリーキンの説には反對であつて、一六—一七世紀のジェントリの社會的性格はもっと複雑なものであつたと主張している。

ジェントリのなかには、一五世紀の大土地所有者のなかからでたものもふくまれるであろうが、それが階級として形成されるのは一六世紀の農業革命のときである。ジェントリの土地所有は、單に封建的土地所有の獨占があたりし條件のもとでも殘存したということだけではなく、修道院領の解散と農民的土地所有の收奪—つまり、農業革命の結果として獲得されたものである。しかし、バルクとラヴロフスキーは、ジェントリを、大土地所有者とい

うよりもむしろ「貨幣資本の代表者」としてとらえている。貨幣資本の土地所有への侵入という現象は、全ヨーロッパに共通の現象であるが、イギリスのばあいには、商人や手工業者は、マナーの領主 (lord) にはなっても、封建領主にはならずブルジョア的な企業家になったという點が特徴的である。

バルクとラヴロフスキーは、ジェントリを單なるブルジョアの土地所有者として特徴づけることに反對し、ジェントリのブルジョアの企業家的な面を重視するが、その論據はこうである。一六世紀を通じて圍込の過程が進行したとしても、獨立した農民の數は、いわゆる「改善された地代」(improved rent) をしはらうことができた借地農の數よりも多かつた。また、その「改善された地代」が多くみられるのも、イギリスのなかで發展の進んだ地方にかぎられていた。だから、發生しつつある資本主義的な地代は、ジェントリの主な収入源の一つにすぎない。したがって、資本主義的な地代を獲得しているということだけでは、つまり、土地所有だけでは、一六一七世紀のジェントリの富強を説明することはできない。そうだとすれば、ジェントリの繁榮の前因はどこにあったのか。それは、ジェントリが農業以外の職業とくに商工業に従事し、そこから大きな収入を手にいれていたからにほかならないといふのである。

バルクとラヴロフスキーは、主として、イギリスの *Calendar of State Papers & Royal Proclamations*^{註一} および一六世紀のウォリックシャの製鐵企業に關するペラムの研究^{註二}のなかから例をひき、また、ペーコンやオグレンダ^{註三}のような當時の著作者のいうところを引用して、ブルジョアの企業家としての新貴族の性格を強調している。

註一 バルクとラヴロフスキーは、サア・トマス・スミス (東インド會社とバアミユダ會社に關係)、ジェイムズ・マックスウェル、ロバート・サンデイス、製鐵業におけるサア・バージル・アルツク、ガラス工業におけるサア・ロバート・マンセル、

銅精錬の特許状を手にいれたインフィールド卿とサア・ジョン・パーシア、ビン製造業のサア・トマス・パジェット、硝石・火薬工業におけるサア・ジョン・ブルック、商人としてのサア・ウィリアムズ・ストウンやサア・ジョン・スビルマンやサア・ウィリアム・ハリスンなどの例をあげている。

註II R. Pelham, «The Establishment of the Willoughby iron-works in North Warwickshire in the 16th century», University of Birmingham «Historical Journal», 1953, Vol. VI. ヌビは「エリザベス朝の地主でウォリックシャーの製鐵企業の創設者であるナイトのサア・フランシス・ウィロビーの例があげられている」。

註III Bacon, «Essay on Riches», works, Ed. Spedding, p. 736. 「土地を改善することは富を手に入れるのもっともふつうのやりかたである……しかし、それには時間がかかる……わたしは、わたしの時代のだれよりも大きな収入をもっていた貴族は、大牧畜業者、大牧羊主、大材木業者、大石炭商、大穀物商、大製鉛業者や大製鐵業者であることを知っていた」。

註四 Hill and Doll, «The good old cause», p. 48. 「ただのカウントリ・ジェントルマンがなんらかでも財産をつくるというような可能性はない。財産をつくるためには、彼は、なにかほかの職業をもたなければならぬ。……鋤についているだけでは、彼は、けっして富むことはできない」。

こうして、バルクとラヴロフスキーによれば、一七世紀前半のジェントリは、「土地所有者的な貴族と資本家的な企業家との社会的な雑種」のようなものであり、單なる squire すなわちただ地代をとるだけの地主ではない。ただ、ジェントリは、大土地所有という點でブルジョアジーの階級とちがっており、また、土地所有を實現する形態が、つまり、大借地農に賃貸したり、獨立の企業家的な經營をおこなったりするのに自分の土地所有を利用しようとする點が、封建貴族とちがっている。ジェントリは、農業革命の先驅者として、また商工業における資本主義的企業の開拓者として特徴づけられる。だが、バルクとラヴロフスキーは、圍込領主としてのジェントリの役割は研究がすすんでいるが、資本主義的企業家としてのジェントリの役割については、これまであまり研究されておら

ず、今後の研究が必要であると問題を提起している。

四

以上のように、三人のソヴェトのイギリス革命研究者のジェントリについての見解を詳細に紹介したのは、このなかにいくつかの重要な問題がふくまれていると考えたからである。

たしかに、ブルジョアジーと新貴族Ⅱジェントリの同盟というマルクス主義の古典の考えかたは、フランス革命とことなるイギリス革命の特殊性を適切に説明することができるよう思われる。ジェントリ把握の基本的な重要性はこの點にあり、この三人のソヴェトの學者が新貴族Ⅱジェントリの問題を特にとりあげたのもそのような觀點からであることはすでにのべた通りである。しかし、それについてのソヴェトの研究には、いくつかの問題、しかも重要な問題がこつてゐる。第一に、イギリス革命の特殊性をとく鍵はジェントリとブルジョアジーの同盟であるということによつて、ジェントリ把握の基本的な重要性があたえられているとしても、それでは、ジェントリの解釋がことなれば、イギリス革命の把握全體にわたつて、また、個々の重要な問題の解釋について、どのようなちがいがでてくるかということが、具體的にしめされていない。この點の分析があれば、イギリス革命研究におけるジェントリ把握の意義というものが、もっとはっきりとしめされることであろう。第二に、ジェントリの土地所有をはっきりとブルジョア的土地所有（經濟的な意味で）といきつてゐる點である。だが、彼らは、イギリスにおける資本主義の發展にともなう貴族の舊封建貴族と新貴族への分裂、新貴族のブルジョア化、ブルジョアジーと新貴族の同盟という一般的なシエーマにしたがつて、新貴族Ⅱジェントリの土地所有をブルジョア的としているのであ

って、その具體的な根據をあげていない。その點では、マルクスにただそのままの感じがあったものというように感じがないでもない。第三に、貨幣資本が土地所有に侵入するばあい、當然、農村自體におけるブルジョア的發展の一定の進展が前提となるものと考えられるが、農村におけるブルジョア的發展により農村自體がどのような變貌をとげたのかを具體的にしめさず、貨幣資本の代表が土地を獲得した事情のみを強調している。第四に、ジェントリの出身については、サブリキンは、中位の貴族および若干の aristocracy とかんがえ、さらに土地を手に入れたブルジョアジーもジェントリの陣營を強化したものとし、バルクとラヴロフスキーはもっと簡単に貨幣資本の代表にして土地を手に入れたものと規定するが、ブルジョアジーが手にいれた土地をどのように經營したのか、しめされていない。じつさい、ブルジョアジーは單なる投機者として土地を手に入れたばあいが多いのだから、土地を手に入れたという事實だけで彼らをジェントリという一つの範疇にいれることは問題であらう。また、修道院解散のばあいに土地を手にいれそれを維持しつづけたものには在地の地主が多かったということ、あるいはドップがイギリスの一六世紀をヨーマンとジェントルマンの融合過程（『資本主義發展の研究』六九、一〇一ページ）と評したような事情はどのように解釋されるのだろうか。都市や農村のいろいろの階層が土地を獲得しあるいは喪失した過程を、個々のばあいに應じて、具體的に研究することが必要と思われる。第五に、いわゆる長老派とか獨立派とかいわれている階層はジェントリやブルジョアジーのなかのどのような階層であるのかをあきらかにすべきである。ジェントリとブルジョアジーの同盟をまとめた一つのものと考えすることはできない。この同盟そのものの内部においても對立がみられる。たとえば、農業問題のブルジョア的・地主的解決の實行方法についても、對立した點がある。それは、沒收された王黨派領地の處分をめぐる長老派と獨立派の對立にしめされる通りである。

バルク、ラヴロフスキー、サプレイキンら三人のソヴェトのイギリス革命研究者のジェントリ把握についての問題點は、だいたい以上の通りである。それにしても、イギリス革命の特殊性とジェントリとの關連をあるていどはつきりさせた點、またこのような視角からジェントリ研究をすすめている點に、われわれは大きな興味を感じさせられるし、參考とすべき點も少くないであらう。